

夢は願った通りにはならないが、思った通りになるように感じます。私たちはよく願うと思います。私たちは「こうなったら良いのにな！」と思うものです。私たちの願いは結果を見てしまい、目的が達成されているのに気付かないことが多いのではないのでしょうか？私たちの思いの結果、叶えられていくものです。私たちは考える必要があります。教会は「どうであるか？」を考えるとこです。私たちは悩むのではなくて、考えなくてははいけません。悩むと下を見てしまうと思います。しかし私たちは下を向くのではなくて、上をそして空を見なくてははいけません。夜空を見ると多くの星があります。星の大きさはどのくらいだと思いますか？とても大きいですよ！夜が長い今の時期に考える事が出来るので、クリスマスの時期によく考える時を持っていきましょう。宇宙の星はピツリで動いているので、私たちは良い環境の中、生活を送ることが出来ます。地球は偶然に出来たものではありません。水が氷となって固まって下に落ちてしまったら、酸素が無くなり呼吸が出来なくなってしまうそうです。全ての生き物が自分の為ではなく、調和しているから生きることが出来ます。自然を見るとき自分だけの為にあるのではなくて、全ての物が誰かの為に生きています。気付いているか、いないかです。クリスマスは愛されたことを知り、愛するためにいるのだ！と再確認する時です。愛すると言う「言葉」が愛することではありません。愛するということは、赦すこととそして、その為に何が出来るかを考えることです。私たちがどのような行動を取るべきかを考えるのがクリスマスです。クリスマスは愛されたことを知り、愛することを学び考え、愛するためにどのようにするか？を決める時です。皆さんは何の役割があるかを知っていますか？これを見失っていると、夢を持っていても、結果になってしまい目的にすることが出来ません。私たちは結果を見てしまいやすいです。私たちは自分で決めて行動をとる必要があります。自分はどうかあるべきかを考えるとき変わることが出来ます。変わったことによって目的を見出すことが出来るようになります。自分はこのために生きている！と思う人は、強いです。結果を見ず目的がわかっている人は、振り返ったときに結果が山のようにあるはずで。ダビデは「詩篇 23:6まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来ましょう。」と賛美しています。彼は、今は得られていないけれど、必ず得られると信じていました。愛していると言われたときどのように感じますか？大切にされているという事を感じて心にある不安に暗闇に光が灯るから嬉しいのではないのでしょうか。だから私たちは愛し合い赦しあっていかななくてははいけません。多くの星は自ら光を放っているのではなく、月の様に光を受けて光って見えます。あなたが愛を流したことによって、あなたに愛が帰ってきます。愛を受けたことのある人は、愛を流すことが出来ます。私たちはされたことしか出来ません。私たちは良いことだけを言うのではなく、悪いことも伝えたりしなくてははいけません。そして、赦し合うことが必要です。また怒るのは大切に思っているからだと思います。その日の怒りはその日の内に処理しなくてははいけません。またあなたの汚い心に光を灯さないといけません。年に一回ぐらいは綺麗にしていきましょう。クリスマスツリーに飾りを付けるのは、私たちの罪を思い起こすために付けられています。私たちの汚い心を神様の前に置いていきましょう。私たちは自己中心的なものです。自分の心の汚いところを隠して扉を閉めてしまいます。真夏に1週間、物置に生ゴミを入れっぱなしにしていたら、とても臭いがしますね。同じように私たちの心が汚かったら悪いものが出てしまいます。私たちは感情というフィルターを持っています。そのフィルターが悪かったら悪いものが出ます。その悪いフィルターを神様の前に捨てていきましょう。それをするによって「仕える」ことが出来るようになります。重荷を置くことによって、誰かの重荷を負うことが出来るようになります。重荷がないと思っている人は、そのことはもっと問題です。問題に目を向けていないからです。きちんと重荷を下ろしましょう。私たちに必要なことは愛されることではなく、愛することです。イエス様は敵を愛するように言われました。そして十字架にかかられました。イエス様は死ぬために来られました。私たちは誰かの為に何かをしたいと思っています。イエス様は汚い暗い心に光を与えるために、命懸けで来てくださいました。マタイ25章から トルストイが、『靴屋のマルチン』という有名なストーリーを書きました。くつ屋のマルチンは ひとりぼっちで淋しく住んでいましたがある日旅を続けている老人が聖書を一冊残して、「これを毎日読み、神様にお祈りする といい」と教えてくれました。マルチンはそれから一生懸命に、神様のことを考え、聖書を毎日読んで「神様がもし本当におられるのであれば、私の所に来てください」と祈るようになりました。 ある日のこと、遅くまで聖書を読んでいると、確かにだれかの声を聞いたように思いました。「マルチン、マルチン。明日、通りをよく見ていなさい。お前の所に行くからね。」と言われました。翌朝神様を迎えるために、ストーブに火をつけ、お湯を沸かし、部屋を暖かくしました。 ステパノじいさんが、寒そうに歩いて来ました。そして温かい紅茶をご馳走しました。知らない赤ちゃんを抱いた女の人が上着も着ないで外を歩いていました。それを見てマルチンは大急ぎで声を掛け、二人を家の中に入れて、暖炉の側に座らせました。「暖まったら赤ちゃんにお乳を飲ませなさい」と声を掛け、台所に行って、朝からお客さん用に準備をしたパンとシチューを食べさせました。そしてマルチンは自分が持っているオーバーを、その人にそっと着せてあげました。辺りが暗くなった頃、一人のおばあさんがマルチンの窓の前に、重そうなかごを肩から降ろして、座り込んでしまいました。かごにはいくつかのリンゴが入っていました。すると、向こうの方から見窄らしい、少年が歩いてきました。少年はリンゴ売りのおばさんの前に来ると、突然手を出し、かごからリンゴをひとつ 取ると、さっと逃げ出しました。リンゴ売りのおばさんは、「泥棒 泥棒！早くつかまえて！」と叫びました。マルチンは大急ぎで通りに出て行って、少年を捕まえました。そして二人の間に入り、おばあさんには、「赦してあげなさいよ。もう二度としないだろうから。」 また少年には「おばあさんにちゃんと謝りなさい。もう二度とこんなことはしてはいけませんよ。」と話しました。少年は泣き出して、素直におばあさんに謝りました。マルチンはかごの中からリンゴをひとつ取りだし、「この代金は私が払うからお食べ」と少年に差し出しました。辺りはもう暗くなりました。仕事場のあと片付けをして、いつものように棚から聖書を取り出しました。すると突然気配を感じ、振り返ってみるとどうやら人影らしいものが立っています。そして彼の耳には、こういう声が聞こえました。「マルチン マルチン。お前にはわたしがわからないのかね。」「どなたですか？」とマルチンは聞きました。「わしだよ」と声が聞こえました。「ほら、わしだよ」…暗い片隅から、雪かきのステパノじいさんが出てきて、にっこりと笑い、雲のようにもやもやとなって消えていきました。「これもわしだよ」…また暗い片隅から、赤ちゃんを抱いた女の人が出てきて、にっこりすると赤ちゃんも笑いだし、これもじきに消えてしまいました。「これもわしだよ。」…と、おばあさんとリンゴを手にした男の子が出てきて、ふたりはにっこりしたかと思うと、同じように消えていきました。マルチンの心は喜びでいっぱいになりました。マタイ 25:40すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』イエス様は愛を示すために来られました。私たちも神様が与えてくださった愛を持って仕えていきましょう。(要約者:渡辺将宏)